

2023年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

1. 提出日：2024年5月31日

2. 提出者氏名：内田賢

3. 申請した研究テーマ：

「東日本大震災被災地における『災害と多様性』の再考—宮城県の草の根女性団体を事例に

4. 研究活動報告

災害による被害は社会構造と密接な関連をもつが、なかでもマイノリティはより高い脆弱性に晒される。2011年の東日本大震災では女性が支援や意思決定の場から排除されたことが明らかになった。

2000年代以降、国際社会は災害対応（防災・支援・復興）において、女性をはじめとしたマイノリティへの支援に高い関心を寄せている。とりわけ、2015年に宮城県仙台市で開催された第3回国連防災世界会議以降は、多様なマイノリティについて支援を享受する客体としてのみ把握するのではなく、主体的な防災・復興への参画を促進する潮流がある。

本研究では、東日本大震災被災地の宮城県で活動する二つの女性団体に注目し、被災した女性の支援や復興政策への参入を進めてきた女性団体が、2020年前後から「多様性 Diversity」というフレームを用いた活動を実践することの意味や背景を考察した。

主な対象は、宮城県の草の根女性団体、「イコールネット仙台」（2003年設立、仙台市、NPO）と「やっぺす」（2011年設立、石巻市、NPO）の「多様性」に関する活動である。具体的には、前者の「多様な視点で取り組む防災力UP講座」と後者の「女性に優しい防災推進モデル事業」について、参与観察とスタッフへの聞き取り調査を実施した。合わせて、活動に関する資料として、講座の広報資料、講座での配布物、活動報告資料なども分析した。

調査の結果、東日本大震災被災地で被災女性を主な対象に活動を継続してきた女性団体が、その活動の射程を広げるために近年「多様性」というフレームを戦略的に活用していることが明らかになった。まず、「災害と女性」を掲げた活動に関心を示してこなかった男性に問題意識を共有する目的である。両団体は、「災害と女性」から「災害と多様性」にフレームを変えながらも、講座の中では女性が直面する困難を後景化せず、女性へのエンパワメントと男性への問題提起をおこなった。また、女性に加えて障害者や高齢者、外国人、子ども、性的マイノリティといった様々なマイノリティの視点を防災講座に導入することに成功した。既存の防災・支援・復興といった災害対応の枠組みはマジョリティ男性を中心に構築されてきたが、両団体の「多様性」を掲げた活動はそうした枠組みから周縁化されるマイノリティどうしの協働を模索する試みであった。

女性をはじめ多様なマイノリティの包摂を提唱した第3回国連防災世界会議では性的マイノリティについて言及されることはなかった。しかしながら、被災地で支援活動をする女性団体にとっては、性的マイノリティの困難は女性の困難と共通するものであるため、両者の結節点にアプローチするべく「多様性」というフレームを用いたことも明らかになった。これを可能にしたのは、国連や国際社会の「多様性」に関する提唱を超えて、両団体によるマイノリティの連帯を重視する草の根活動の蓄積と、それをもと

にした「多様性」への主体的な意味づけであった。

本研究に関連する 2023 年度の成果は以下の 4 点である。今後はさらなる考察を深め、国際ジェンダー学会大会や学会誌などで本研究の成果を発表したい。

1. 内田賢, 2023a, 「東日本大震災とインターセクショナルな女性支援：宮城県仙台市の女性団体による実践から」, 東北社会学会 2023 年大会, 2023 年 7 月.
2. 内田賢, 2023b, 「英語圏における『災害とケア』研究の潮流：単一的・規範的な災害支援への批判」, 国際ジェンダー学会 2023 年大会, 2023 年 9 月.
3. 内田賢, 2024a, 「ポスト 3・11 の日本における『災害と多様性』再考：宮城県の草の根女性団体の事例から」, 一橋大学大学院社会学研究科地球社会研究専攻修士論文, 2024 年 1 月.
4. 内田賢, 2024b, 「災害とダイバーシティ：マイノリティへの支援は『ぜいたく』なのか」, 『世界』(980), 岩波書店, pp. 91-96, 2024 年 3 月.